

[論文]

マンスフィールドの  
New Zealand Stories  
——パケハ批判の視点から——

柴田優子

- 〈目次〉 はじめに  
I ニュージーランドもの  
II ‘How Pearl Button Was Kidnapped’ (「パール・ボタンがさらわれた話」)  
III ‘The Woman at the Store’ (「小屋の女」)  
おわりに

## はじめに

キャサリン・マンスフィールドは1888年、ニュージーランドの首都ウェリントンに、裕福な家庭の三女として生まれた。下にはさらに妹と弟がいて5人兄弟の真ん中である。父は一代で財を築いた実業家で、ニュージーランド銀行の取締役の地位にまでのし上がり、本国・イギリスへの経済的貢献が認められてナイトの爵位を授与された。

そもそもイギリス本国から一攫千金を夢見て新大陸・オーストラリアに渡ってきたのは、この父の父親——マンスフィールドの祖父——だった。

一方、母方の曾祖父もイギリスから新天地・オーストラリアに移住した開拓者だった。つまりマンスフィールドはパケハである。パケハはマオリ語で、ニュージーランドに定住するヨーロッパ系白人を意味する。本稿では、このパケハの視点をもって作品群を改めて読み返してみたいと思う。特にパケハ批判が色濃く表れている2作品——‘How Pearl Button Was Kidnapped’（「パール・バトンがさらわれた話」）と‘The Woman at the Store’（「小屋の女」）——を考察する。

## I ニュージーランドもの

マンスフィールドの父親は、1903年から3年間、マンスフィールド（当時14歳）を二人の姉とともにロンドンのクイーンズ・カレッジに留学させた。この時、父は総勢9人の大家族を引き連れ、貨客船の客室すべてを貸切にして、ロンドンまでの7週間の船旅をする。1903年のロンドンと言えば、7つの海を征服した最強の国で、大英帝国の栄光で輝いていたはずである。子どもたちは初めて見る大都会ロンドンに目をみはる。中でもキャサリンは、この時から17歳までの多感な3年間をそこで過ごし、世紀末文学にすっかり魅せられ、芸術家になることを夢みるようになる。1906年、3年の留学期間が

終わり、両親が迎えにきて一旦はニュージーランドに連れ戻されるが、両親を説得し、1908年（19歳）再びロンドンに戻ることに成功した。結果的に、以後2度と祖国の土を踏むことはなかった。しかし、憧れてきたはずのロンドンに居場所はなかった。自分を‘the little Colonial’（小さな植民地出身者）と呼んで蔑んでいることが日記に残っている<sup>(1)</sup>。そもそも、クイーンズ・カレッジへの留学中、すでに彼女は“a little savage”（小さな未開人）と侮辱されている。ニュージーランドでは裕福なパケハだったのに、イギリスでは「植民地から来た未開人」として立場が逆転した洗礼をすでに留学中に受けていたのである。そうして、だんだんイギリス嫌いになっていくのは二度目の渡英の後のことである。時すでに遅しだった。その後、第一次世界大戦が勃発する不穏な社会情勢、また自分自身も肺結核になるなど不遇な状況の中、1923年、34歳の若さで亡くなる。つまりその短い作家活動はすべてイギリス、フランスなどヨーロッパで行われたということである。なのに、実質15年ほどしか居なかったニュージーランドを舞台にした作品群 New Zealand Stories と呼ばれるものがある。日本語では「ニュージーランドもの」と呼ばれている。一般的には晩年に書かれた傑作群を指しているが、実は初期の頃から時々ニュージーランドを舞台にした作品は書かれていた。

ここに、ニュージーランドが舞台となっている、あるいはニュージーランドの思い出をもとに書かれている作品群を改めて列挙しておく。

- ‘A Birthday’（「誕生の日」）
- ‘New Dresses’（「新しい服」）
- ‘The little Girl’（「小さな女の子」）
- ‘Ole Underwood’（「オール・アンダウッド」）
- ‘The woman at the Store’（「小屋の女」）
- ‘Millie’（「ミリー」）
- ‘How Pearl Button Was Kidnapped’（「パール・バトンがさらわれた話」）

---

 1915年
 

---

- ‘Prelude’ (「前奏曲」)
- ‘The Voyage’ (「船の旅」)
- ‘At the Bay’ (「入江のほとり」)
- ‘The Garden Party’ (「園遊会」)
- ‘The Doll’s House’ (「人形の家」)

1915年で分けているのは、その年に、マンスフィールドの人生観を変える、その結果作品にも変化をもたらした出来事があったからである。

イギリス軍に志願した弟が、イギリスでの訓練を終え、ヨーロッパ大陸の前線に赴く直前、1週間の休暇を使ってロンドンの姉の家を訪ねて来たのである。7年ぶりの再会だったが、顔も感性もよく似ているふたりはたちまち意気投合する。ウェリントンで過ごした日々の思い出が溢れ出てきて、‘The Wind Blows’ (「風が吹く」) という作品を書いた。そこでは Windy Wellington と言われる有名なウェリントンの風が吹きまくっている。すぐに雑誌『シグネチャー』に発表された。しかし、発表からわずか3日後、すでに戦地へ赴いていた弟が、手榴弾の手入の最中、その暴発により事故死してしまうのである。

マンスフィールドは悲嘆にくれる。しかし3か月後、まるで今までの仮の姿から脱皮したかのように、新しい自分として——使命をはっきり自覚した人として——再び立ち上がるのである。その自覚を日記にこう記す。

今、今こそ、私は祖国の思い出を書きたい。そう、思い出を書き尽くすまで書きたいのです。弟と私が生まれた「神聖な恩」をただ返したいからでなく、頭の中で、ありとあらゆる思い出の地を弟と一緒に歩き回っているからなのです。片時も心から離れません。何としても私が書いて復活させたい。<sup>(2)</sup>

こうして使命感を持って書かれた1915年以降の傑作群は翻訳も手に入りやすく、よく引き合いにも出される。本稿では、それらではなく、あえて1915年以前の作品、すなわちニュージーランドへの使命を自覚する前の作品群に焦点を当てて読んでみる。1915年以降の作品群と比べてその特徴のひとつがパケハ批判である。特にパケハ批判が色濃く表れている2作品、‘How Pearl Button Was Kidnapped’（「パール・バトンがさらわれた話」）と‘The Woman at the Store’（「小屋の女」）を取り上げる。

これら2作品に‘Millie’（「ミリー」）を加えた3作品は、1907年、ロンドン留学が終わってウェリントンへ戻ってから1908年に再び渡英するまでのわずかな期間に、父のすすめで知人の一行に加わって行ったウレウエラ地方（北島奥地のマオリ族の住む地域）への3週間のキャンプ旅行<sup>(3)</sup>でつけた日記を利用して後年、イギリスへ渡ってから作品の形に仕上げたものである。この日記は、*Urewera Notebook*として出版されており、読んでみると、そこにはマオリの風土・天気・出会ったマオリ人のことなどが書きつけられており、Maori countryの特徴がリアルに色濃く表れている。

では、まず‘How Pearl Button Was Kidnapped’（「パール・バトンがさらわれた話」）から考察する。

## II ‘How Pearl Button Was Kidnapped’ （「パール・バトンがさらわれた話」）

主人公の女の子、パール・バトンがHouse of Boxesの家の門のところで遊んでいると、太った女がふたり裸足で歩いてきた。赤や黄色といった原色の服を着て、手にはflaxの繊維で編んだかご（かごの中にはシダが入っている）を持ち、話しながら微笑んで歩いてくる。二人の女はパールを見かけ、声をかける。パールは誘われて一緒に歩いていく。女と同じ浅黒い肌の色をした男女が大勢いる所に着いた。みんなで海を見に行った。海で一緒に遊んでいると、遠くの方から青い制服の男たちがホイッスルを吹き、何やら叫び

ながらパールに向かって走ってきた、というお伽話風の短編である。

作中一言も「マオリ」とも「パケハ」とも書かれていないが、明らかにマオリ人がたまたま道端にいたパケハの女の子を興味本位からちょっと誘い出し、自分たちのコミュニティーへ連れてきて、真新しく可愛らしい人形でも扱うかのごとく皆で可愛がる話である。マオリには女の子を「さらった」意識はないし、女の子の方にも「さらわれた」意識はない。最後は「青い服を着た男たち」、つまり警察が捜索に来るが、そこも含めた出来事の顛末が一貫して女の子・パールの視点を軸に描かれている。では、「マオリ」と「パケハ」の対比を明らかにすべく、まずパール・バトン（パケハ）の視点や発言を詳しくみてみよう。

まずはじめに、パールは自分の家を指すのに the House of Boxes / Houses in Boxes 「箱の家 / 箱状の家々」という表現を使っている。後半、海にやってきた場面で、パールはマオリの女の子に矢継ぎ早に尋ねる、「箱を並べたお家はないの？みんな一列に住まないの？男の人は会社に行かないの？いやなことないの？」と。このことから、パールの住むパケハの近隣はきっちりと四角い家々が真っ直ぐな通りに沿って整然と並んでいると考えられ、それをパールが表現すると the House of Boxes になる。5～6歳にしてすでに“nasty things いやなこと”と覚えることが詰まっているのが、パケハの House of Boxes の生活なのである。

しかも、入れる中身を示唆する Box 「箱」であることから、その内側で繰り返されるもの——このバトン家の規則づくめの生活や女子パールへの躰など——も含めた全体でパケハの中産階級を象徴するようにマンスフィールドによって意図された表現だと思われる。

では「バトン家の規則や女子パールへの躰」とは何であろう。

たとえば冒頭で、「お母さんはどこにいるの？」と問われたパールは「台所でアイロンかけてる、火曜日だから」と答えるが、「火曜日だからアイロンの日」と子供もそらで言えるほど曜日ごとにきっちり守られた日課や規則が他にもたくさんあることを示唆している。また、マオリの集まる場所に着

き、汚れた床に座るとき、彼女はエプロンとワンピースを注意深く引っ張り上げ、ペチコートの上に座った。汚れたところに座るときはそうするよう教えられているからである。また桃を頬張り汁がポタポタとエプロンに垂れると慌てて「汁が全部こぼれちゃった」と言うことでわかるように、ワンピースを汚さないよう厳しく躰けられていることが伺い知れる。これに対してマオリの女は、「ぜんぜん構わないのよ」と意に介した様子もなく言うだけである。

これに対してマオリがどう描かれているかみてみよう。

ふたりのマオリの女は太っていて、ひとりは赤、もうひとりは黄色と緑という原色の服を着て、ピンク色のハンカチで頭を包み、flax（亜麻）で編んだかごにシダを入れて手に持ち、肌は浅黒く、靴下も履かず、裸足で歩いている。

“they talked to each other with funny words” 「変な言葉で話している」のはパールの視点で、つまりはマオリ語であると考えられる。

抱き上げてくれた女はベッドより柔らかく、いい匂いがした。荷馬車で海を見に移動するときに膝に乗せてくれた別の女も、猫みたいに暖かく、彼女はパールの小さい手を取り、指一本一本にキスし、裏返して今度はエクボのような窪みにもキスした。こうして、マオリ人との接触は、パールの視点による表現からパールが今まで感じたことのない安堵と幸福感を感じさせるものだったことがわかる。

そしてマオリの家々は、パケハの the House of Boxes と好対照をなしている。

丘の上から眼下の海沿いに見える小さな家々は、木製の塀が周囲をぐるりと囲み、中には庭があった。それを見るとパールはホッとした。子どもの視点なので、なぜホッとしたのか客観的な説明は皆無である。しかし5歳児が、初めて見るマオリの家々にホッとするのである。おそらくそれは、抜け目なく、遊びのないきっちりとした the House of Boxes と違い、人を警戒

させるような要素は全くなく、見るからに牧歌的でおおらかな雰囲気であり、庭も楽しい遊びと直結するポジティブなイメージを作り出したのであろう。逆に the House of Boxes の中の生活がどれほど窮屈かを、そして子供の遊び心を刺激する余裕がどれほどないかをあぶり出しているであろう。

こうして、マンスフィールドは、マオリの直線的でない家々やおおらかな態度と対比することで、the House of Boxes「箱の家」に象徴されるパケハの中産階級の生活がいかに窮屈でつまらないものと映るように描いたのである。正面きっての批判でなく、あくまでも少女の視点を軸にした軽妙洒落な文体で書かれているのがこの作品の特徴であるが、タイトルの“Kidnapped”（誘拐された）に、マオリへのパケハの凝り固まった偏見がはっきりと、色濃く表れていると言ってよい。

### Ⅲ ‘The Woman at the Store’（「小屋の女」）

この作品は、「パール・バトン」よりさらに具体的に、ウレウエラ地方で書きつけた日記の素材を利用して書かれている。たとえば出だしの1段落目をみると、Maori countryの荒涼とした風景を再現するために、その素材をこの日記から取っていることがわかる。

まず、‘The woman at the Store’の第1段落目である。

All that day the heat was terrible. The wind blew close to the ground ; it rooted among the tussock grass, slithered along the road, so that the white **pumice** dust swirled in our faces, settled and sifted over us and was like a dry-skin itching for growth on our bodies. **The horses** stumbled along, coughing and chuffing. The pack-horse was sick— with a big open sore rubbed under the belly. Now and again she stopped short, threw back her head, looked at us as though she were going to



cry, and whinnied. Hundreds of **larks** shrilled ; the sky was slate colour, and the sound of **the larks** reminded me of slate pencils scraping over its surface. There was nothing to be seen but wave after wave of tussock grass, patched with purple **orchids** and **manuka** bushes covered with thick spider webs<sup>(4)</sup>.

そして次にあげるのが *Urewera Notebook* の記述の一部である。

-*Thursday* the rain— long threading— purple mountains— river ducks— the clumps of broom— wild **horses**— the great **pumice** fire— **larks** in the sun— **orchids**, fluff on the **manuka**...<sup>(5)</sup>

見やすいように共通する単語を太字にしたが、それで見取れるように、この場面の雰囲気を出すための重要なイメージは、すでに Mori country を旅したときにできていたということである。

見渡す限りのコメススキの大地を3人は馬に乗り移動している。1日中ひどい暑さで、風がまきあげた軽石の砂埃が体に振りかかってくる。荷物を積んだ馬は腹に大きなすり傷ができていて、ゆっくりとしか進めない。荒涼とした大地には所々に紫色のランとマヌカが点在するのだが、美しいはずのランはコメススキに隠され、マヌカにもクモの巣がびっしり張っている。

ここで再現された「ニュージーランドの原風景」ともいうべきマオリの国の荒涼とした気候・風土こそがこの小屋の女を狂気に追いやった、と主張するのが三神である<sup>(6)</sup>。

昔は美しかったこの小屋の女は、この奥地の食料雑貨店を夫と営んでいるが、鉄道が敷かれたために乗合馬車が来なくなり客足が途絶え、夫も何週間も家を空ける有様である。6年の結婚生活で4回も流産し、生まれた女の子も、お乳が満足に出ないせいで発育不良、知的な遅れもある。女の不満は鬱積し、ついに彼女を夫殺しへと駆り立てる。しかし、この女の狂気の本当の

原因は夫ではなく、このマオリの国の風土である<sup>(7)</sup>。

マンスフィールドの筆は、この埃っぽくて荒々しい、洗練されない土地に暮らしながらイギリスの方を向き、イギリス風の生活を送るこの女の行為の違和感をあぶり出す。

今度も、「パール・バトンがさらわれた話」同様、「パケハ」という表現こそないが、この主人公の女を「青い目に黄色い髪」と描写し、パケハである<sup>(8)</sup>ことを明示している。

この女のイギリス志向を示す表現を見てみよう。

It was a large room, the walls plastered with old pages of English periodicals. Queen Victoria's Jubilee appeared to be the most recent number.... The mantelpiece above the stove was draped in pink paper, further ornamented with dried grasses and ferns and a coloured print of Richard Seddon.<sup>(9)</sup>

イギリスの雑誌のページを壁にペタペタ貼ってあり、どうやらヴィクトリア女王即位60周年の記事が最新のもののようである。マントルピースにはイギリス生まれのニュージーランド首相 Richard Seddon の複製画が飾ってある。また、この女は、“...the place ain't tidy. I'ven't time ter fix things today— been ironing...” という女の台詞でわかるとおり、訪ねてくる人もいないのに一日中アイロンがけをする。「アイロンがけ」は、本作品中ではイギリス文化の象徴と位置付けられるだろう。こうして、この女の気持ちは根底からイギリスを志向しており、その生活はイギリスの生活様式をなぞっているのである。

マンスフィールドはこの女を徹底的に醜く描く。「確かに女の目は青く、髪の毛は黄色かったが、不器量な女だった。同情されるほどの容姿である。彼女をみていると、そのエプロンの下には棒と針金しかないような感じがした——前歯は突き出ている、赤いぶよぶよした手をしている。足には、きた

ならしい半長靴をはいていた」

その言動も徹底的に滑稽に描かれる。今晚はここへ宿泊するつもりでこの奥地の小屋に立ち寄った男性二人、女性一人の一行に対して、「泊まって欲しくないんだよ…だめだつてば、…他をあたってみなつて、どうして、あんたたち、泊めなきゃならないんだよ！」と突っぱねた舌の根も乾かぬうちに「泊まりたいんなら、そうすればいい！」と簡単に前言を覆す。この女は Maori country の風土の只中で、狂おしいほどの寂しさと性的な枯渇に苛まれているのである。一行の女性に「こんなところでもくる日もくる日も、あんな小娘やきたならしい犬と暮らすなんて、そしてアイロンをかけることにわずらわされるなんて、気が狂っているんだわ、そうだわ、あの女は気が狂っているのよ！…」と言わしめるほど客観的にみて正常ではありえなかった。

マンスフィールドはこうして、憧れて行ったはずのイギリスで、イギリス礼讃をするのでなく、捨ててきた故郷ニュージーランドのパケハ——自分もそうであるパケハ——を徹底的に醜く滑稽に描き、批判する、という捻れたことをするのである。おそらくは自分を見失っている時期、あるいは作家になるためにアイデンティティを模索している時期であったのであろう。少なくともパケハの自覚はあり、しかしそれを肯定する十分な理由が見つからなかったのであろう。そんな時期のマンスフィールドにウレウエラで見た Maori country は決定的なインパクトを与えた。一時、マオリの司祭になることを夢見るほどマオリ族に入れ込んだ。翻ってパケハとしての自分を見つめたとき、マオリへの入れ込みが強ければ強いほどそれがパケハ批判という形をとって我が身に返ってくる、ということは十分考えられるであろう。実際、これが一時的な入れ込みであったことは、後期の作品にはパケハ批判もマオリ礼讃もすっかり影をひそめたことでもみて取れる。

阿部昭は書く、

…お金に不自由のない、体験とやらを漁り回る無軌道娘の、醜聞だらけ

の、荒んだ日々という、ありふれた経歴。彼女には、背いたはずの父親からの一定額（\*年100ポンド）の仕送りがあった。父親はその約束を娘が死ぬまで履行する。妊娠と聞いて、（ニュージーランドから）飛んできて修道院に入れたのは母親である。そういう「体験」から何が書けるだろう<sup>(10)</sup>。

と手厳しい。しかし、この後、冒頭で紹介した1915年の弟の戦死（事故死）という体験とそれに伴う使命感の悟りを経て、マンスフィールドの創作は急激に変化していくのである。阿部昭も「彼女の伝記でいちばん劇的なのは、この部分である。彼女は自分が描くべき題材は、実は足もとに転がっていたのだということ，“永遠に見捨てるつもりで”出てきた土地と、無用の過去とみなしてきた時間こそ、自分が帰って行く場所であることに気がついたのである<sup>(11)</sup>」と書いている。

一時の熱に冒されたようにパケハ批判・マオリ礼讃を繰り返したマンスフィールドが、熱から醒め、弟も失い、自分がその出自であるパケハというアイデンティティに向き合い、受け入れ、そして愛するということができるようによくなったのである。激しい気性だったマンスフィールドにとって、パケハ批判という軌跡がなければパケハ受け入れというその後の回帰はなかったであろう。つまりパケハ批判は、パケハというアイデンティティを受け入れるために通らなければならなかった必然の軌跡だったのである。

## おわりに

ニュージーランドを舞台にした作品の中から、パケハ批判が色濃く現れた2作品を選んで考察した。

‘How Pearl Button Was Kidnapped’は少女の視点を軸にしたおとぎ話風の作品で、軽妙洒脱な文体で書かれており、決して表立ってパケハ批判をしているわけではないが、マオリとパケハの生活様式や考え方・言動の違いを際立たせており、結果、パケハへの辛辣な皮肉を込めている。

‘The Woman at the Store’ はマオリの風土に精神を病んだパケハの女のイギリス志向を丹念に描き、滑稽では済まない狂気の沙汰——夫殺し——を描いて辛辣なパケハ批判をする。

こうして自分もそのひとりであるパケハを批判したのは、いずれも弟を失う前の作品である。パケハであるというアイデンティティを受け入れられなかったマンスフィールドは、しかし、愛する弟を失った後、弟と自分がその出自であるパケハを丸ごと受け入れた。パケハに限らず、捨ててきたニュージーランドの過去すべてを受け入れ、慈しみ、作品という形で再生させたのである。パケハ批判は、ニュージーランドに回帰するための必然の軌跡だったと言える。

\*本稿は、日本ニュージーランド学会、日本ニュージーランド協会、日本マンスフィールド協会の3学会「合同研究会（2021年3月13日、オンライン開催）」における研究発表原稿に加筆・修正を施したものである。

[注]

- (1) “And I am the little Colonial walking in the London garden patch—allowed to look, perhaps, but not to linger. 1919年の日記。日付はなく Geraniums と題された小述の中に書かれている。 *The Journal of Katherine Mansfield* (Constable, 1954), p. 157.
- (2) Now—Now I want to write recollections of my own country. Yes, I want to write about my own country till I simply exhaust my store. Not only because it is ‘a sacred debt’ that I pay to my country because my brother and I were born there, but also because in my thoughts I range with him over all the remembered places. I am never far away from them. I long to renew them in writing. January 22, 1916, *The Journal of Katherine Mansfield* (Constable, 1954), pp. 93-4.
- (3) キャンプ旅行といっても内実は過酷な馬車の旅で、その行程は、Hastings まで汽車で行って知人と合流、Napier を起点に Rangitaiki まで北上し、そこから進路を東へ向けてウレウエラ地方に入って Te Whaiti, Umuroa などを巡

ったあと、北上して Waiotapu, Rotorua, そこから南下して Waikato, Taupo などを訪れ、再び Rangitaiki に戻り、来た道を Napier まで南下する、という 3 週間ほどの旅だった。

- (4) 'The Woman at the Store', *The Stories of Katherine Mansfield*, ed. Antony Alpers (Oxford University Press, 1984), p. 109. 本稿中の作品からの引用はすべてこのテキストに依る。
- (5) *The Urewera Notebook*, Katherine Mansfield, ed. Ian A. Gordon (Oxford University Press, 1978), p. 86.
- (6) 三神和子「キャサリン・マンスフィールドにおけるパケハ批判」, 『オーストラリア・ニューージーランド文学論集』(彩流社, 2017) 所収。
- (7) 三神和子「キャサリン・マンスフィールドにおけるパケハ批判」, p. 111.
- (8) "...there's a woman too, Jo, with blue eyes and yellow hair,..."
- (9) 'The Woman at the Store', p. 111.
- (10) 阿部昭『短編小説礼讃』(岩波新書) p. 152. アスタリスクは筆者書き込み。
- (11) 阿部昭『短編小説礼讃』(岩波新書) p. 154.